

---

# オジサマ王と勘違い少女

ティシー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オジサマ王と勘違い少女

### 【Nコード】

N40820

### 【作者名】

ティシー

### 【あらすじ】

半年前、地球からトリップした私。森での生活も慣れたものだった。

そんなある日、いつも通り朝食の調達を川でしていると、オジサマが現れた。

どこか風格漂うオジサマ・・・あなたは何者？

昔はイケメンだったであろうオジサマと、少し思考回路がずれてる少女の物語。

連載小説名で作った「ファンタジー短編集」へ、この小説を含む  
全短編小説を移動しました。

（前書き）

突然思いついたので。

何でこうなった・・・？

川で釣りをしていたから？

森の住人と呼ばれるまでに、森に住み着いていたから？

いや、半年前地球からこの地へトリップしてしまったからか？

だってまさか、川で会ったオッサンが、

一国の、この国の王様だったとは・・・。

・・・

「んっ！今日もいい天気！

気分爽快！

体調万全！

テンション上々！

さあ、朝ご飯を調達だ！！」

釣り道具を持って川へ行くと、木の陰になる場所を選び早速釣りを始める。

木々の隙間から入る陽気が気持ちよくて、釣竿を持ったままウトウトしていた。

すると突然手応えを感じ、バツと目を開ける。・・・が、

「・・・・・・・・つっ！！？？・・・・？！！」

視界に入っただのは旅装姿のオッサン。  
声にならない声を上げると、距離を取り胸に手を当て呼吸を正す。  
竿はオッサンの横に転がっている。

「ああ、悪いね。驚かせたかな？」

「お、驚いたなんてもんじゃないです。寿命が半年縮まりました！」  
「それはそれは大変だ」

全然大変そうじゃない！

私は久々に人を見たものだから、過剰反応をしてしまっていた。

「オツ・・・あなたは!？」

「今オツサンって言おうとしたよね? まあいいけど。

ボクは通りすがりの者です」

ウソじゃん。ここは完璧な森で、通りすがれる所なんてない。

「・・・」

疑いの目を向ける私に対してオツサン よく見ると雰囲気がおジサマっぽい。若い頃は格好良かったのでは? は笑顔を返してくる。

「森の妖精がいると聞いてね。是非ともこの目で確かめたかったんだ」

森の妖精?・・・この森に?

ニコニコと裏のない笑顔でしゃべられると、つつい警戒が緩んでしまう。

「その妖精は見たんですか?」

「ああ、見れたね」

今度私も探しに行こうかな。

「どんなでした?」

「背が小さくて、長い黒髪に大きな黒目。外見は愛らしいけれど活発的」

「・・・」

「君だね」

「・・・・・・はっ!？」

「本当に森の妖精なのかな？」

誰が？私が！？

「まさか！！」

「そう。なら何故この森に住んでいるの？」

「ええ！？えつと・・・」

トリップしてきたからです！なんて絶対信じてもらえない！

「ああごめんね。まだ無理に答えなくてもいいよ」

まだ・・・？

「ど、どうも・・・」

「君は顔に出るようだね」

クスクスとオジサマは笑う。

そんなに顔に出てる？

「ああそうだ、名前を聞いてもいいかい？ボクはバル」

「・・・芽<sup>めえな</sup>慧菜」

「メーナ？いい響きだね。それじゃ森の妖精も見れたことだし今日は帰るよ。」

またねメーナ」

そうして、颯爽とオジサマ　バルさんは帰っていった。



私が森の妖精？っていうか、メーナじゃなくてメエナなんだけだなあ。

しばらくバルさんが消えた方向を見ながら、そんなことを考えていた。

.....

それから一週間、バルは毎日姿を見せた。

私がどこにいても何故か見つけるのだ。

一週間も経つと私もすっかり警戒を解いていた。

それに徐々に人と会話していることが嬉しくて、親友を作った気分だ。

地球から来た事もすでに話してある。

でも気になる事が一つ。

「バルは仕事してないの？」

「ん？しているよ」

「でも毎日来るじゃん」

「休暇を取っているのさ」

「じゃあそろそろ来なくなる？」

「寂しいのかい？」

「そりゃあ・・・せつかく友達出来たのになあって」

「友達ね。今はそれでいいけど・・・メーナ次第なんだけどね」

「何が？」

「こつちの話。メーナは何歳だい？」

「17。バルは？」

「43だよ」

「43!？」

「ん？なんだい？」

「いやなんか・・・いえなんでも」

「まだまだ元気だよ？」

「何が？」

「何だろうね」

「バルってなんか不思議」

「そうかい？」

「うん」

食えないオジサマだ。

「バルの仕事って何？」

「ん？何だろうね」

「ヒント！」

「うーん、王宮」

「王宮!？」

あ、分かった！

「掃除のオジサマか!！」

バルが掃除をしている姿を想像する。  
にこにこしながら、皆に挨拶して・・・

「似合うよバル!！」

「・・・そうかい。ありがとう」

「あ、でも庭師とかのが合うかも？」

「・・・」

「いつから働いてるの？」

「・・・幼少期」

「じゃあ若い時モテたでしょう？」

「若い頃っていうか、今も結構モテると思うんだけど」

「いやん！バルったらプレイボーイ！！」

「そこでテンション上がるんだね」

「バルって若い時格好良さそうだもん」

「ふむ。どうだったかな。」

「メーナはどうなんだい？」

「私？普通じゃない？」

「セックスは何人としたことがあるんだい？」

「せつ！？いやんバル！いくらバルがプレイボーイだからって言葉はオブラートに包むもんだよー！」

「いやテンション上がられても」

「バル奥さんは？」

「いないね」

「そうなの！？てつきり奥さんに内緒で愛人が何十人もいるのかと・

・」

「メーナはボクにどんな印象持ってるんだい・・・」

少し呆れ気味にバルは呟く。

「えっ、プレイボーイ？」

「メーナって少し思考回路がずれてるよね」

「そう？」

「そう」

首を傾げながら考えていると・・・

「バルケルト様！漸く見つけましたよ！！」

若い兵士っぽい人が息を切らしながら走って来た。  
・・・バルケルト様？

「バルの事・・・？」  
「バル！！？」

私の呟きに、近くまで来た兵士が反応した。  
そうか、様を付けられているくらいだから結構上の格なのか。

「王宮お抱えの装飾師とか？」  
「やっぱりメーナはずれてるよね」  
「メーナ？ああ・・・！その、方が」  
「ああ。準備は？」  
「整っていますが、しかし本当に・・・」  
「何も言うなよラロツト」  
「！はい・・・」  
「装飾師って立場強いんだね・・・」  
「はあ・・・。まあいいや、少し早いけど行くよメーナ」  
「えっ？どこに？」  
「王宮に」  
「はっ！？私そんな技術ないよ！」  
「何の技術だい。大丈夫、ボクは床の技術なら自信がある」  
「何の話ですか！？・・・あ、失礼しました」

バルの一言にツッコむ若い兵士。

「さあ、行こうか」  
「だからどこに！？」  
「イイ所」

「待つて！何か危険を感じる！

「これでも半年森で生きて来たから！危機回避能力が警告を」  
「ゴチャゴチャ言つてないで行くよ」

ひいい！な、なんかバルが今怖かった！！

「そろそろ着きます」

「ああ」

そして、ソレはやつて来た。

「馬車？」

「そう。さあ乗つて」

渋る私をバルが押し込むと、馬車は走り出した。

「あの・・・」

「なんだい？」

「なんていうか・・・王宮つて大きいですね」

「そうだね。所で何で敬語？」

「今バルの装飾師としての腕に尊敬の念を抱いているからです」  
「装飾師に決定したんだね。」

「さあ入つて」

「お、お邪魔します・・・」

多くの兵士や侍女が頭を下げている。

「装飾師ってすごいんだ・・・」

「・・・」

はー、とかへー、とかおー、とかほーとか間抜けな声を連発しながら王宮の中を歩く。

「あの・・・」

「なんだい？」

「なんていうか・・・ここは？」

「玉座」

「それは、バルの座っている所です、わたし、私の座っている所は・・・」

「まあ一般的に言う王妃の座る所だね」

「で、ですね」

アレ？なんか・・・人生最大の勘違いでもしてた？

「あの・・・」

「なんだい？」

「なんていうか・・・王様、だったりとか、しちゃいます？あはは・・・」

「そうだね」

っ！！！！

サラっと、サララっと言ったよこの人ー！！

え？え？え？？

…はっ！！

「私今から処刑されるのっ！？」

「何故？」

「だって無礼を！」

「今更だね」

「そうですよね！？」

「父上、お話の途中失礼します」

「ああいいよ」

「その方が噂の方ですよ」

「そうだね」

「では」

そこで青年は私の前に跪く。…ええ！？

「母上。お待ちしておりました」

「はい！！？」

「自由奔放な父ですが、よろしく願います」

「えっ？ちょ、ええ？！」

母上！？

「ば、バルル！」

「一つルが多いね。なんだい？」

「これっ、これはどういうことでしょうか！！？」

「ボクとメーナが結婚するってことだよ」

「はっ！？」

「いいよね？まあ拒否権はないんだけどね」

「ええ！？」

「大丈夫、まだ手は出さないよ」

「あのおっ！！？」

かくして、前途多難な私の王宮生活は始まった。



（後書き）

ありがとうございます。他の作品も読んでいただけると嬉しいです！

いつか小説の続きを書こうと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4082o/>

---

オジサマ王と勘違い少女

2011年1月19日23時01分発行